希
のぞみ

希　04

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=14815777

ヒュンマ

ダイ大　ヒュンマ小説です。twitter/miya_haniwa555
本編が終わってから二年後にダイが見つかり、しばらく経った後のお話です。ヒュンマ、ポップ→←メルル、ダイレオ、アバフロ前提でお話が進んでいます。
◇マァム視点　◆ヒュンケル視点
ヒュンケルさん……ふぁいと！
PixivさまのTwitterリンクは驍泰アカにルーラします。

Table of Contents

希　04

◆

　寝台へ彼女の体を下ろし、覆い被さる。自分が最愛の人を組み敷いているという状況に狂おしい程に胸が高鳴る。
　けれど、マァムの様子がおかしい。
「マァム？」
　やさしさを意識して声を掛ければ、彼女の瞳は不安で揺らいでいた。
　これからの行為への不安や怯えではないようだが、本人が一番わかっていないようで戸惑っている。気分転換させるべきだろう。
「マァム、先に風呂に入ってこい」
「え？」
「疲れただろう……ゆっくりしてくるといい」
　少女から大人へ移ろい行く年の女性。
　所謂、青春と呼ばれる時代を戦いで埋め尽くした彼女。
　真っ直ぐな彼女のことだから、ただひたすらに大魔王バーンに勝つことだけを考えていたはずだ。
　ダイやポップの足手まといにならないように強く。アバンの使徒としてみっともない姿を見せないように強く。世界に平和を取り戻すために強く。純粋に力を求めて、強くなる以外の道を見ることすらなかっただろうマァム。
　戦いに明け暮れ、ダイを探す途方もない旅路を越え……
　思いもしなかったオレへの想いを諦めて故郷へ帰ろうとしていたところを、急にオレが結婚したいと言い出したのだ。恋人を通り越しての結婚。急激な方向転換に心が付いてきていない可能性が高い。
　口では嬉しいと言ってくれているが、心のどこかが……あまりの速さに取り残されているような感じがする。
「……でも」

「タオルはオレが準備するから、着替えを用意するといい」
　くしゃりと暖かい色の髪の毛を撫でる。
　横たわるマァムを抱き起こして、額にくちづける。
「戦いが終わって、ダイを探して……オレたちはあまり一緒にいられなかった。その間に、綺麗になったな。マァム」
　ずっと思っていたことを素直に告げる。
　手を取って立たせる。
「背が伸びたか？　いや、あまり変わらんか」
「ちょっとは伸びたものっ」
　ムキになって言い返す様に笑ってしまう。
「これからはずっと一緒にいられるんだ……これからのオレ達の話もしよう」
「ヒュンケル」
「時間はたくさんあるんだ。焦る必要はない……オレはおまえに合わせる。だから少しでも不安だったら聞かせて欲しい。マァムの思いを」
「……どうして、私が不安だってわかるの？」
「これでも魔王軍団を率いていたんだぞ」
　あまり褒められた冗談ではないが、彼女なら許してくれるだろう。そう言うとマァムは真ん丸に目を丸めて、そして吹き出した。
「百戦錬磨の軍団長を相手にしていたあなたなら、私が何を考えているかなんてお見通し？」
　まるで悪戯っ子のような物言いすら可愛い。
　モルグのことも、部下のことも、父の声も……不思議なことに彼女となら思い出を共有出来る。ご縁という言葉もあるが、オレの幸せを願う父達が遣わしたもうた僥倖に感じてしまうのは大袈裟だろうか。
　彼らは感傷で思い出すことを由（よし）としないだろうが、オレは忘れたくない。
　忘れられない。
　もう既にこの世にいない彼らを、オレ以外で一番知っている異性はマァムだということが、ただ嬉しい。
　敵も味方も曖昧な彼女。

彼女にとっては、どちらも救うべき相手。
　こんなふうに気軽に口にしてくれることに、何故だか安堵の思いが湧き上がる。
　軍団長同士の醜い権力争いに比べれば彼女の不安がる姿など数百倍も美しく、清らかで可愛らしい。
「なんとなく……マァムが不安を感じているようだということくらいしかわからんがな」
「でも、凄いわ」
「話をしよう、マァム。おまえは、オレを頼っていいんだ」
　心の底からそう思う。
　守りたい。頼られたい。
　少女から大人の女性へ羽化し始めた彼女を、今度こそ腕の中で庇護したい。
「ありがとう、ヒュンケル……お風呂、先にいただくわ」
「ああ、ゆっくり入ってこい」
　見上げてきた瞳は、まだ揺らいでいるけれど……先程のような暗い色はわずかばかり払拭されていた。棚にあるタオルを渡せば、そのタオルに頬を寄せる。その姿は愁いを帯びて大人びて見えた。
　でも、彼女の心根はまだ少女のまま。
　ずっと諦めようと思い込んでいたのに、急に諦観を捨てていいと言われたのだ……この数時間を惜しむ必要はない。
　彼女がオレの腕の中で女になるのを、導けばいい。
　それくらい、我慢出来る。

　◇

　年の功というものなのだろうか？
　広く煌びやかな浴室でマァムは大きな溜息を吐き出す。
　もう、聞くしかない。
　こんなふうに悩んでぐだぐだしている自分は好きじゃない。正面

からぶつかって、彼に今の私を理解して欲しい。
　相談は苦手だ。
　言い方やタイミングが悪いのか、今までは母さん以外の誰かに相談しようとしても反論されたり論破しようとされたり馬鹿にされたりで、意見を聞いてもらえたと思う時は少なかった。
　よくわからないのに、怒鳴られたり睨まれたり……本当によくわからない。はっきりと言って欲しい。わからないから聞くのに、そうするとわからないのかと呆れられる。なんだかとても淋しくなってしまう。
　でも、ヒュンケルは聞いてくれるという。
　……好き。
　もう、しみじみとそう思ってしまう。
　私の好きな人は素敵過ぎる。
　彼がそう言ってくれるなら、きちんと聞いてくれるだろう。
　この心の中のもやもやを。
　大事な人が、自分を大事にしてくれるってこんなに嬉しいことなんだ。
　私はニコニコとウキウキとドキドキが混ざった……不思議な高揚感の中、体を綺麗に洗った。

　お風呂を出ると、ヒュンケルが入れ違いに入っていく。
　飲んでいるようにと渡されたのは、宿屋の人に頼んだのだろうフルーツとスパイスが効いたホットワイン。きっと子供向けなのだろう。アルコール分はしっかりと飛んでいるようだが、体も心もぽかぽかする。
　暖炉の炎を見つめながらホットワインを啜る。
　響くのは、小さな火が弾ける音。
「マァム」
　呼び掛けられて振り返れば、少しばかり慌てた様子のヒュンケル

がいた。髪の毛もまだ拭い切れていなくて滴が落ちる。
「ヒュンケル、風邪を引いてしまうわ」
　いつも大人の彼がなんだか子供みたいで可愛い。
　隣に座った彼の頭を拭う。
　世話のかかるポップやダイの頭を、居もしない弟のように拭ってあげたのがなんだかずいぶん昔のようだ。四人と一匹でいた頃は、彼が長兄で、私が長女で……と自然とそんな役割ができていた気がする。
「マァムがどこかへ行ってしまいそうで、つい」
「……そんなこと、しないわ」
　苦笑いをしてしまう。
　逃げたいとは思わなかったけれど、本当に私でいいのだろうかという思いはまだ付き纏っている。
「ヒュンケルもホットワイン、飲んで」
「ああ、ありがとう」
　律儀だな、と思う。
　いつもきちんとお礼を言ってくれる。
　思い返せば、まだ不死騎団長だった頃から彼は律儀だった。もともとの性質がそうなのだろう。
　あたたかい。
　暖炉の炎、ホットワイン、隣にいる丁寧な人。
　泣きそうなくらい幸せで……でも、だからこそ不安になる。
「幸せ過ぎて……本当にいいのか不安になるな」
　ヒュンケルの独り言のような呟きに息を呑む。
「……ヒュンケル？」
「嬉しいんだ……心の底から嬉しい。だが、おまえのような素敵な女性をオレが手に入れていいのか……まだ悩む時がある」
　私を見ずに、床に吐き出すように言う。そして、顔を上げ私を正面から見つめて笑って断言する。
「だが、オレはもう悩まない。オレの居場所は、おまえの隣だ。相応しくないと断じる者がいても、オレはもう逃げない」
　笑顔でこの言葉を断言するのは反則だ。
　ああ、もう見透かされてる。

私も、私の不安を言うしかない。
「私、出会った頃の純粋な正義の使徒じゃない……」
「オレが惚れたマァムはそんな存在じゃない」
　ヒュンケルはカップを置いて、頭を撫でてくれる。
「私……子供で……」
　上手く、言葉にできない。
　頭の中には言いたいことがいっぱいあるのに。
「マァムは、今いくつだ？」
「十九歳……」
　そうか、出会ってからもう三年も経つんだ……
「オレがおまえに出会ったのが二十一歳の時だ。二十一歳のオレも子供だった。二歳も若いおまえが子供の部分を持っていたとしても仕方がないだろう」
　軽く笑うように言われる。
「オレは、変わったか？」
　手の中のコップを取られて、机に置かれる。
　そして両手で、私の両手を包み込む。
「変わった部分もあると思うし……変わらないところもあるわ」
「そんなオレは、おまえから見てどう思う？」
「……好き」
　ふにゃっと顔が緩んだのがわかる。
　そんな私を見てヒュンケルは目を見開き、微笑む。
「自分の意見をはっきり言う正義感に溢れた少女から、自分の役割を認識して努力する戦士……そして、自分をきちんと見つめて変わろうとしている女性。はっきり言えばマァムは眩しいよ」
　その言葉に目を瞬く。
「蛹から蝶へ羽化する様を目の当たりにしている気分だ。美しく愛おしい……心からそう思っているから、嫌われるかもとか見当違いの不安を抱かずに、おまえがどう思っているかを聞かせてくれ」
　退路を断たれた。
　なんだかそんな気分になった。
「……私ね、故郷のネイル村では少ない男手の代わりにずっと村を守っていたの。ネイル村は魔の森の近くだったから」

「魔の森……クロコダインの領域だったな」
「そうなの？　……だから、クロコダインがダイ達を襲ったのね」
「それで？」
　ヒュンケルはやさしく促してくれる。
　握られた両手はそのままで。
「私にとって、世界も世界に住む人たちも守るべきものだったの。私は守られる立場じゃなくて、守る人。ずっとそう思っていた」
「ああ」
「自分の中の正義にずっと従って行動していた……でもね、他の恋をしている人たちを見て、わからなくなったの」
「わからない？」
「……私の正義は、ただの押しつけじゃないのかって」
「マァム」
　ヒュンケルは私の名前を呼んで、そのまま見つめてくる。
　続けるように、瞳が言っていた。
「クロコダイン、ヒュンケル、フレイザード、アルビナス……他にもたくさんの人たち。言葉が届いた人もいれば、鬱陶しがられるだけだった時もあったわ」
「そうだな」
「今思えば……よく殺されなかったなって。女だったからかもしれないけど」
　魔王軍は敵ではあったけれど、武士道とか騎士道精神とか……戦いに誇りを持っている人が多かった。
　筆頭は、今目の前にいる人だけれど。
「私の正義は……独り善がりで自分勝手な、相手を思っていない行動だったんじゃないかって。だから、また間違えて、あなたを傷付けてしまうかもしれない」
「間違えている、間違えていないというのはわからないが……オレは、十六歳のおまえの愛に救われた」
　目を合わせて、ヒュンケルは言ってくれる。
「敵味方関係なく目の前の人をただ救いたい、守りたい……そんな純粋で真っ直ぐな愛に救われたんだ」
「ヒュンケル……」

「解釈はどうでもいい。オレは、確かにおまえに救われた。それだけでは不満か？」
　少し軽めの口調に、冗談めかしているのか本気なのかがわからない。
　でも、ヒュンケルが本心から言ってくれているのはわかる。
「……ううん」
「もしも、マァムの心のどこかに同情や恋慕が入っていたら……あの時のオレには届かなかったかもしれない」
「え？」
　目の前の人はやさしいけれど、淋しそうな瞳をしていた。
「父の遺言を聞いても尚、頑なに認めようとしなかった復讐に囚われていたオレの鎖を切ったのが、おまえが言う自分勝手な正義なのだろう」
　あたたかな大きな手。暖炉から小さく火がはぜる音。
「過去は振り返っても戻らない……行ったことは覆せない」
　ヒュンケルが強く手を握る。
「パプニカ王国にはオレのことを憎んでいる者が大勢いるはずだ。そのうち、刺されるかもしれない。殺そうと狙ってくる者だっているだろう」
「ヒュンケル！」
　ヒュンケルがそんな覚悟をしてパプニカ王国に居続けていたなんて、知らなかった。
「親や子供……家族や大切な者を殺された恨みの深さは、オレが一番理解しているつもりだ」
「……ヒュンケル」
「おまえの意図がどうであれ、オレは十六歳のおまえに助けられた……二十一歳のオレは、おまえの気持ちに応えるために正義の光を求め続け、たくさんの仲間を得た。それに、マァムに情けないところを見せたくなくて、意地を張っていたのはオレだけじゃない」
　くすりと笑う。
　その笑いには少しばかりの自嘲が入っているようだった。どういうことかわからなくて首を傾げれば、彼は不意に私を膝に乗せ胸の中に囲い込んだ。

「ダイの露払いで対バーン戦に挑んだ者がいる……そいつらのほとんどが、懸命に戦うおまえに励まされていた。守るべき少女が戦っているのに、大の男が逃げられるかと意地を張った」
「まさか……」
　冗談だろうか？
　ヒュンケルの冗談はわからない時がある。
「マァムはいつも一生懸命だった。おまえは頑張っていた。その姿に励まされていたのは本当だ。自分を褒めてやれ」
　背中をぽんぽんとやさしく叩かれる。
「怖かっただろうに……懸命に強がっているおまえが居てくれただけで、勇気をもらった者がいる」
「……私は、強いもの」
　よく言われた。マァムは強いって。おまえは強いから俺らの気持ちがわからないんだって言い募られたこともある。
「本当か？」
　顔を覗き込まれて、体が固まる。
「私……」
「言っていい」
「……私、強く……なんて、ない。誰かに縋りたい時もあった。守られたいって思った時もあるの」
　口に出して、それが自分の本心だとようやくわかった。私、弱音を吐きたかったんだ。本当にそうして欲しかったかは別として、弱音ぐらい吐き出したかった。
「そうだな。十六歳の子供ならそう思う時があっても、当たり前だ」
「当たり前？」
「ああ……本当に頑張っていた。おまえが、十六歳のおまえを否定するなら、オレが肯定する。独り善がりで自分勝手……だったか？　そんな正義に邁進する愛にオレは救われたんだ」
「ヒュンケル」
「それでも、その気持ちを出すことのなかったおまえは強く……尊敬に値する」
　もうダメだった。

涙が止まらない。
　彼の胸に縋り付いて泣き続ける。
　強い、強いっていつも言われて、マァムは俺らの助けがなくても大丈夫だろうって突き放されたこともあった。怖かった。淋しかった。でも父さんと母さんの代わりに頑張らないと……私はアバン先生の教え子なのだからって思い続けて。
　肩肘張って、正義に邁進して……
　そんな子供の正義漢が、今、救われた。

　しばらく、泣き続ける。
　あたたかくて広い大きな胸に縋りながら。
　ヒュンケルは鬱陶しがることもなく、丁寧に私を撫で続けてくれた。好き。大好き。
　ヒュンケルの腕の中なら、私は女の子になれる。

　―――女になってもいいんだ。

　その安堵は、思っていた以上に大きくて……いつの間にか、彼の腕の中で眠ってしまっていた。

了